

《研究ノート》

スポーツ文化財としての
オリンピック関連資料の収集について 第三報
— 1924年第8回パリオリンピックに関する収集品 —

*Third Report on Olympic memorabilia, constituting sports cultural assets,
relating to the 1924 Paris Olympic Games*

藤 瀬 武 彦*

Abstract

In the third report the author presents part of a collection of Olympic memorabilia relating to the 1924 Paris Olympic Games. The report includes the All Japan Athletics Olympic Qualifying program, the Olympic official report of the Japanese team, fifteen Paris Olympic official programs brought back from Paris by Shiso Kanakuri, a passport issued to Yoshio Sarumaru, a track and field athlete who had withdrawn due to injury after being selected for the Japanese team, to enable him to travel to France to watch the Paris Olympics, and the boxing gold medal official diploma of Danish boxer Hans Nielsen along with the original photograph of the Danish Boxing Team. Although the Great Kanto Earthquake struck in September 1923 causing tremendous damage, the Japanese team, which had to overcome many difficulties in the aftermath of the earthquake in order to participate in the Olympics, achieved impressive results which prepared the way for the following Olympic tournament.

Keywords: Paris Olympics, memorabilia, Yoshio Sarumaru, Hans Nielsen, Danish Boxing Team

1. はじめに

第8回パリオリンピックは1924年（大正13年）7月5日（開会式）から27日（閉会式）までフランスのパリで開催された。近代オリンピックを復興させたフランス人のピエール・ド・クーベルタン（第2代IOC会長：1897～1925年在任）は、第1回大会を1900年にパリでスポーツ博覧会とともに開催するつもりでいたが、初代会長のデミトリウス・ピケラス（1894～1896年

* Takehiko Fujise

新潟国際情報大学 経営情報学部 経営学科
〒950-2292 新潟市西区みずき野 3-1-1

Department of Business Administration, Faculty of Business and Informatics, Niigata University of International and Information Studies, 3-1-1 Mizukino, Nishi-Ku, Niigata City 950-2292

在任)の主張により第1回大会は1896年に古代オリンピック発祥の地であるアテネで開催され、第2回パリ大会は1900年(明治33年)に万国博覧会の一部として開催されたために盛り上がりには欠けるものとなってしまった。1924年第8回大会の開催都市には複数の都市が立候補していたが、第2回大会の汚名を返上するために2度目のパリ開催を希望するクーベルタンIOC会長に対しては、それまでのオリンピック運動にその生涯の大部分を捧げてきた彼の功績に報いるためにパリで開催することが決定された。この大会には44カ国から3,092名の選手が参加し^{註1)}、後にこのパリ大会を映画化した「炎のランナー(原題 Chariots of Fire)」(1981年公開)の主人公のモデルとなったイギリスのハロルド・エイブラハムス選手(陸上男子100m金メダル、4×100mリレー銀メダル)、あるいは「類猿人ターザン(原題 Tarzan the Ape Man)」(1932年公開)などの主演俳優となったアメリカのジョニー・ワイズミュラー選手(競泳男子100m及び400m自由形、4×200m自由形リレー金メダル)などが活躍した大会であった。この大会では初めてオリンピック村(選手村)が使用され、メインスタジアムのコロンブ競技場の周囲に1軒4名収容できる木造コテージが50戸ほど建築されて、日本のような小規模の選手団はこの選手村に滞在した。

日本選手団は1912年(明治45年)ストックホルム大会及び1920年(大正9年)アントワープ大会に続き3回目のオリンピック参加となり、岸清一団長及び役員8名(野口源三郎、杉本 伝、澤田一郎、近藤茂吉、日比野寛、内藤和行、杉浦卯三、竹内廣三郎)、並びに陸上8名、水上(競泳)6名、庭球4名(太田芳郎選手は盲腸炎のため棄権した)、レスリング1名、見學員3名の合計31名であった。この前年の1923年(大正12年)9月1日に関東大震災が発生してあまりに被害が大きかったためにオリンピック参加が危ぶまれたが、大日本体育協会は選手団派遣を決定した。競技結果については、レスリングフリースタイルフェザー級で内藤克俊選手(ペンシルベニア大)が銅メダル獲得(グレコローマンでは4回戦敗退)、織田幹雄選手が陸上三段跳びで6位入賞、高石勝男選手が競泳100mと1500m自由形でともに5位入賞、斎藤巍洋(さいとう たかひろ)選手が競泳100m背泳で6位入賞、競泳男子4×200m自由形リレー(宮畑虎彦、野田一雄、小野田一雄、高石勝男)で4位入賞を果たした。

2. 収集品と解説

1) 全日本陸上競技予選会プログラム及びパリオリンピック大会報告書

写真1に示した陸上競技の大会プログラムは、1924年(大正13年)4月12日～13日に東京帝国大学駒場運動場で開催された「巴里国際オリンピック大会 全日本豫選会 プログラム」(第二次予選会)である。これには元の持ち主の署名があり、男子10000mに出場した廣島青年所属の「尾崎澤夫」と記されていた。

織田幹雄著の「陸上競技百年」などによれば、初日の男子10000m決勝で田代菊之助選手が32分48秒6の日本新記録で優勝してパリ大会の日本代表となった。しかし、他種目の決勝が行われた2日目は雨となり、柔らかい土のトラックや助走路に水たまりができて、番狂わせが次々に起こったという。例えば、100mで日本人初の10秒台(10秒8)を出した短距離の第一人者であった谷三三五(たに ささご)選手は男子100mで優勝できずに3位となったが(1位 表 聰悟、2位 竹内兵蔵)、結局は100mと200m(24秒6で優勝)の日本代表に選ばれた。

一方、写真2-1に示した「第八回巴里国際オリンピック競技大会報告書」には日本選手団(写真2-2)や有名選手などの写真が掲載されている。7月6日に実施された陸上100m第1次予選で、

谷選手は「炎のランナー」のモデルであったハロルド・エイブラハムス選手（金メダル獲得）と一緒に走って3着となって落選しているが、このときのスタート直後の写真が掲載されていた(写真2-3)。また、谷氏は7月8日に実施された男子200mでも第2次予選で優勝者のジャクソン・ショルツ選手（アメリカ：100mでも銀メダル獲得）と走って落選している。予選の組み合わせとしては不運であったものの、本人は優勝者と全力で争うことができ思い残すことなし、と喜んだという。

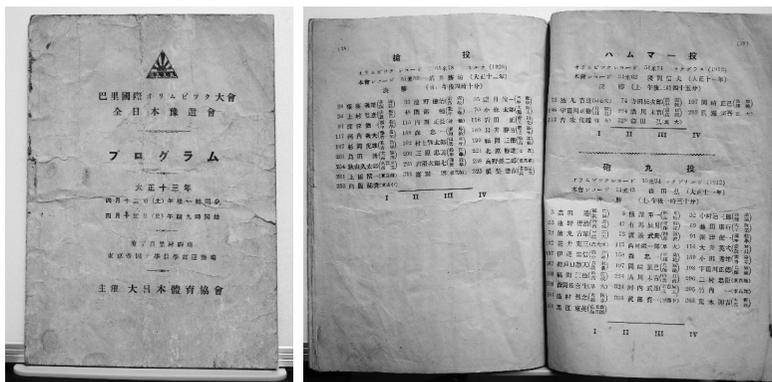


写真1. 巴里国際オリンピック大会全日本予選会プログラム（陸上競技）の表紙（左）と投擲種目のページ（右）。

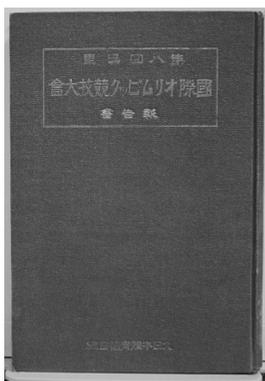


写真2-1（左）. 第八回巴里国際オリンピック競技大会報告書（1925年発行）。

写真2-2（右）. 香取丸船上にて日本代表選手一行（大正13年4月29日に門司から出港）。

前列左より納戸徳重（東京高等師範：陸上400m・800m・十種競技）、石田恒信（関西学院大：競泳100m背泳・200m平泳ぎ）、高石勝男（早稲田高校：競泳100m・400m・1500m自由形）、野田一雄（浜松商業：競泳400m・1500m自由形）、谷三五（満州鉄道：陸上100m・200m）、二列目左より竹内廣三郎役員、金栗四三（東京高等女子師範教員：マラソン）、澤田一郎マネジャー、野口源三郎陸上コーチ、岸清一団長、岸夫人、近藤茂吉役員、杉本 伝水上コーチ、内藤和行ドクター、三列目左より佐藤信一見學員（東京高等師範）、二村忠臣見學員（東京高等師範）、織田幹雄（広島一中出：陸上走高跳・走幅跳・三段跳）、宮畑彦彰（東京高等師範：競泳100m・400m自由形）、上田精一（東京高等師範：陸上五種競技）、森田俊彦見學員（農業大出）、斎藤巍洋（立教大：競泳100m背泳）、四列目左より田代菊之助（中央大：陸上10000m・マラソン）、小野田一雄（拓殖大：競泳100m・1500m自由形）の諸氏。

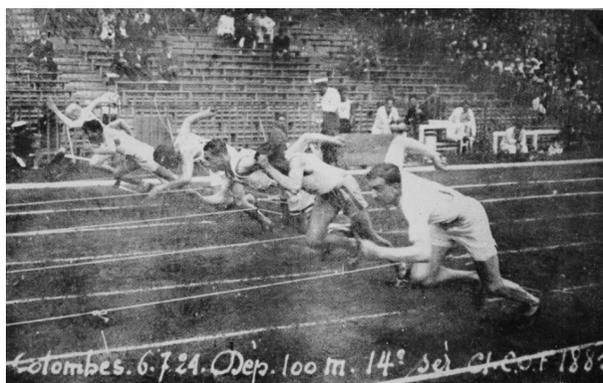


写真 2-3. 陸上男子 100m 予選における谷三三五選手（右より五人目：右端はエイブラハムス選手）。



写真 2-4. マラソン日本代表選手（左から三浦弥平、金栗四三、田代菊之助の諸氏）。

2) 公式プログラム（元の持ち主は金栗四三氏とのこと）

今から 10 年ほど前に、著者が第一報で報告したストックホルム大会の「第 5 回オリンピック写真集」や、「戦前オリンピック出場選手のネガと写真」あるいは「戦前オリンピックプログラム 16 冊」の 3 件が同時にかつ別々に熊本県内の骨董商からネットオークションに出品された。それらの商品説明には「・・・実名は明かせませんが、1912 年ストックホルムオリンピックに出場された方から譲って頂いた貴重な資料になります。・・・」とのことであった。この説明が事実であるとすれば、その出場者は金栗四三氏（写真 24：熊本出身で 1912 年ストックホルム、1920 年アントワープ、1924 年パリの 3 大会に出場）しか存在せず、その 3 件の品物自体と出品者が熊本の骨董商であることから考えると、元の持ち主が金栗氏であることは疑いようがない。ただし、「出場された方」と記載されていたが金栗氏自身は 1983 年（昭和 58 年）11 月 13 日に 92 歳で亡くなっているため、おそらく骨董商は金栗氏のご遺族から品物を手に入れている可能性が高いと思いつつ入札した（後にご遺族から譲り受けたことを説明された）。しかし、著者は「プログラム」を入手したが、「写真集」と「ネガと写真」は落札することができなかった。

入手した公式プログラムは写真 3 に示したが、この 15 冊以外に「オリンピックの一般規則とプログラム (General Regulations and Programme of the Olympic Games)」が含まれていたため合計 16 冊であった（水泳のプログラムの中に飛び込みと水球が含まれている）。この大会の競

技種目数は、芸術競技も含めて19競技もしくは20種目（正式競技18、公開競技2）ともいわれているので、その他の競技プログラムが存在していたのかは不明であるが、馬術などのプログラムが欠けているのかもしれない。

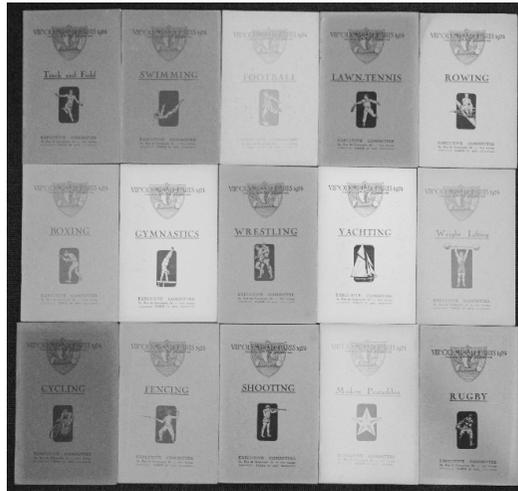


写真3. 第8回パリオリンピックの公式プログラム15冊（縦210mm×横134mm）。

左上から陸上競技、水泳、サッカー、硬式テニス、ボート、二段目左からボクシング、体操、レスリング、ヨット、ウエイトリフティング、三段目左から自転車、フェンシング、射撃、近代五種、ラグビーのプログラム。

3) 陸上日本代表内定選手（猿丸吉雄氏）の旅券

写真4に示した旅券（パスポート）の元の持ち主は、猿丸吉雄氏（後に猿丸吉左衛門と改名し、兵庫県芦屋市長を務めた：1903 - 1983年）である。彼の陸上競技歴は1923年（大正12年）に砲丸投げで11m57、1926年にハンマー投げで40m87の日本新記録など5回にわたって日本記録を作った。また日本選手権では第10回大会（大正11年）の砲丸投げ（10m48）で優勝し、第6回（大正12年）極東選手権大阪大会では同種目で4位になっている。他の競技においても、1922年に全国学生相撲では初代学生横綱に輝き、柔道においては20歳で4段を取得して「最も若い4段」と言われたという。

大正後期の日本陸上投擲界の第一人者の一人であった猿丸氏であったが、1924年に開催されるパリオリンピックの日本代表に内定していたものの、脚力を強化するための跳躍運動で脚を故障したために本大会に出場できなかったという。しかし、彼は「どうしてもパリ五輪を見たい」と単身渡航している。1924年の第8回パリオリンピックは、5月4日（競技開始：開会式は7月5日）から7月27日（閉会式）まで行われている。この旅券はおそらくその時に使用されたものと思われる。旅券の表には、「右ハ国際オリンピック大會出席ノタメ佛蘭西(巴里馬耳塞)、英国、独逸、瑞西、西班牙、丁抹、瑞典、白耳義、(以下省略)・・・希望ス 大正十三年四月二十八日」と記載されている。この旅券の裏側を確認すると、神戸からフランスへの出国が4月28日になっており、大会観戦後にイギリス（ロンドン）やカナダ（ハリファックス）などを經由して帰国していることが分かる。

ただし、猿丸氏が日本代表に内定していたという記録は確認できなかった。例えば「國民體育」（大正12年12月號）では大正12年11月10日に開催された全日本陸上競技選手権大会の砲丸投

げやハンマー投げの入賞者の中に猿丸氏の名前は見当らなかった。また写真1に示した予選会プログラムの中にハンマー投げと砲丸投げに猿丸氏がエントリーしているが、「第八回巴里国際オリンピック競技大会報告書」(予選会各種目1位から4位まで記載)によれば両種目とも上位入賞者の中に名前が記載されていなかった(怪我のためかもしれない)。一方で、1923年に大日本体育協会で発表された新記録の中に「砲丸投げ(12ポンド)13m06 猿丸吉雄(同志社)」があり、また同年に実施された第6回極東選手権大会の記録が特別記録として「ハンマー投 35 m 71 猿丸吉雄(同志社)」とされていることから、仮に猿丸氏がパリ大会日本代表内定者ではなかったとしても、日本代表候補者であったことは間違いなさであろう。



写真4. 猿丸吉雄氏の旅券の表(左:縦262mm×横200mm)と裏(右)。

4) ボクシング優勝者ハンス・ニールセン選手の賞状とデンマーク選手の集合写真

写真5はボクシングライト級の優勝者であるハンス・ニールセン選手(Hans Nielsen:1899年9月2日-1967年2月6日)は金メダル賞状である。彼はデンマークのアマチュアボクサーであり、現在までにオリンピックのボクシングで金メダルを獲得した唯一のデンマークのボクサーである。ニールセン選手は1920年アントワープ大会ではフェザー級に出場して2回戦で敗退し、1924年パリ大会では7月20日の決勝でアルゼンチンのアルフレッド・コペッロ(Alfredo Copello)選手を破って金メダルを獲得した。さらに1928年アムステルダム大会では金メダルを獲得したイタリアのカルロ・オーランディ(Carlo Orlandi)選手に準決勝で敗退し、また3位決定戦でも敗退してメダルを逃してしまっている。このように彼は3大会連続でオリンピックに出場して活躍するような極めて優秀なボクシング選手であったが、決してプロ選手にはならなかったという。品物が送られてきたときに梱包の中から1枚の写真が出てきたが(写真6)、幸いにもその写真にキャプションが貼られていたので人名を特定することができた。

1920年代のオリンピックのボクシング競技におけるデンマークのメダリストは、1920年アントワープ大会ではフライ級銀メダルのアンダース・ペターセン(Anders Petersen)、ライト級銀メダルのゴットフレッド・ジョハンセン(Gotfred Johansen)、ヘビー級銀メダルのソーレン・ペターセン(Soren Petersen:写真6左端)、1924年パリ大会ではライト級金メダルのハンス・ニールセン(Hans Nielsen:同右端)、ライトヘビー級銀メダルのタイジ・ペターセン(Thyge Petersen:同右から2人目)、ヘビー級銀メダルのソーレン・ペターセン(2大会連続銀メダ

ル)、また1928年アムステルダム大会ではヘビー級銅メダルのミカエル・ミカエルセン (Michael Michaelsen) の各選手がいる。この大会のボクシング競技のメダル数は、1位がアメリカ (金2、銀2、銅2:出場選手16名)、2位がイギリス (金2、銀2:16名)、3位にデンマーク (金1、銀2:8名) となっており、出場選手のメダル獲得率から評価するとデンマークはこの当時のボクシング最強国であったといえよう (アルゼンチンは10選手中4個のメダルを獲得しているが金メダルが無かったのでメダル獲得数7位となっている)。

パリ大会当時のボクシングは、フライ級 (50kg以下)、バンタム級 (53kg以下)、フェザー級 (57kg以下)、ライト級 (61kg以下)、ウェルター級 (66kg以下)、ミドル級 (72kg以下)、ライトヘビー級 (79kg以下)、ヘビー級 (79kg超) の8階級制であり、各階級に各国3名のエントリーが可能でそのうち2名が試合に出場することができた。この大会にはアメリカ、イギリス、フランス (銅1) の3カ国だけが16名のフルエントリーをしていた。



写真5 (左). ハンス・ニールセン選手のパリ大会ボクシング金メダル賞状 (500mm × 465mm)

写真6 (右). パリ大会のデンマークボクシングチームのオリジナル写真 (170mm × 225mm)

左からソーレン・ペターセン (Soren Petersen: アントワープ及びパリ大会ヘビー級銀メダル)、ホルジャー・ハンセン (Holger Hansen: セCOND)、チャールズ・ペターセン (Charles Petersen: ライト級)、ロバート・ラルセン (Robert Larsen: ヘビー級)、1人 (帽子をかぶった男性) 置いて、タイジ・ペターセン (Thyge Petersen: ライトヘビー級銀メダル)、及びハンス・ニールセン (Hans Nielsen: ライト級金メダル) の諸氏。

3. おわりに

2020年は世界的な新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 拡大のために開催予定であった東京オリンピックが近代オリンピック史上初めて2021年 (7月23日から8月8日まで) に延期されることになった。その歴史においては、1916年第6回ベルリン大会は第一次世界大戦で、1940年第12回東京大会 (東京大会返上後のヘルシンキ大会も中止) 及び1944年第13回ロンドン大会は第二次世界大戦でオリンピック開催が中止となった苦い経験がある。しかし一方で、1920年8月に開催された第7回アントワープ大会では、第一次世界大戦で大被害を受けていたうえに大戦中に世界的に大流行したスペイン風邪^{注2)} が収束していない状況 (欧米では1919年夏までに収束) で開催されたものの大会は大成功を収めている。特に日本ではスペイン風邪が流行している時期 (第2波: 1919年8月-1920年7月) にアントワープオリンピックに参加して

テニスで日本初の銀メダルを獲得している。

また前述したように、日本では1923年9月1日に関東大震災が起これり甚大な被害を出した中でオリンピック予選会を開催してパリ大会に参加した経験がある。この巨大地震によって10万人を超える死者・行方不明者を出すなど甚大な被害を負った中で、9月30日に大日本体育協会の名誉会長であった嘉納治五郎はパリ大会参加の方針をまとめて、10月1日には協会名で「第八回国際オリンピック大会参加の宣言」をしてその準備が進められた。その宣言では、「帝都今回の大震災は独り一帝都に就てのみならず全日本帝国にとりての一大打撃にして此を速急に恢復するは此際全日本国民の一致協力して努力すべき所なりと雖も一方昇天の勢を以て向上を続けつつある我が国現在の運動会をして此の一変革の爲めに頓挫せしむるは我が国将来の爲め極めて遺憾なりと言わざる可からず 我が大日本体育協会が予て明年七月巴里に開催せらるべき国際オリンピック競技会に選手を送るの計画ありし事は既に朝野一般の知るところなり、…(中略)…、仍て本会はこの際たとへ小規模なりと雖も特に優秀なる選手と指導者にとりて之を彼地に送りて我が国運動会将来の発展に資せんと欲し本日をして其の趣旨の決議をなせり、本会は朝野識者一般の好意ある諒解に訴えて其の賛同を得んことを希望す」と述べている（「日本体育協会五十年史」より抜粋）。

様々な困難を乗り越えてパリ大会に参加した日本選手団は、レスリングで銅メダルを獲得してその後のレスリング大国となるべく礎を築き、陸上三段跳びで初入賞してその後に同種目オリンピック三連覇（1928年アムステルダム大会の織田幹雄選手、1932年ロサンゼルス大会の南部忠平選手、1936年ベルリン大会の田島直人選手の金メダル）を達成し、競泳でも100m自由形や100m背泳などで初入賞してその後の大会で多数のメダルを獲得する（1928年男子200m平泳ぎ鶴田義行選手金メダル、1932年男子100m背泳で金銀銅独占、1936年前畑秀子選手による200m平泳ぎで女子初の金メダルなど）など大活躍した。

最近（2020年11月8日）、東京の代々木第一体育館で体操の国際大会（「Friendship and Solidarity Competition（友情と絆の大会）」）が開催された。同大会は新型コロナウイルスの感染症拡大後としては初めて海外から選手を招いた大会（参加国はアメリカ、ロシア、中国）で、2021年の東京オリンピックを安全に開催できることを海外へアピールするために様々な感染対策が行われた。例えば、中国選手団はウイルスの持ち込みや持ち帰りを防ぐために防護服を着用して2国間を往復した。

以上のように、世界的に新型コロナウイルス感染症が拡大しているからといって安易に大会を中止するのではなく、現在は有効なワクチンも開発されてきていることから過去の経験や知恵を活かして、可能な限りの三密（密接、密集、密閉）を避けるような対策を講じれば、おそらく感染拡大を防止あるいは収束に向かわせることができると思われることから、大会の簡素化や経費削減をしてでも2021年第32回東京オリンピックを開催して大成功に収めてもらいたい。

注釈

（注1）第8回パリオリンピックの参加人数には諸説あり、「オリンピック事典」では3,092名（正式種目18、公開競技2）とあるが、「近代オリンピック100年の歩み」では3,070名（19競技140種目）、「ウィキペディア」では2,972名（19競技126種目）となっている。参加国は44カ国で一致しているが、実施競技や種目の数え方が異なっているために（例えば、競泳・飛び込み・水球の数え方、芸術競技をカウントしたか否か、など）参加人数が異なったものと思わ

れる。

(注2)「スペイン風邪」は、1918年から1919年にかけて猛威を振るった世界的に大流行したH1N1型インフルエンザの通称である。世界人口(18～19億人)の約27%の5億人が感染し、死者数が1億人を超えていたともいわれ、人類史上最も死者を出したパンデミックの一つといわれている。この流行源は不明であるが、感染情報がスペインから発せられたためにスペイン風邪との名前で呼ばれている。その第3波(1919年1月-)は欧米では1919年夏までに収束したが、南半球の国々や日本には遅れて到達し、各地で大きな被害を出した。日本におけるスペイン風邪の被害(死者数)は、第1波(1918年8月-1919年7月)が約25万7千人、第2波(1919年8月-1920年7月)が約12万7千人、第3波(1920年8月-1921年7月)が約3千700人といわれている。

参考文献

- ・大日本体育協会. 第八回巴里国際オリンピック競技大会報告書. 體育研究社. 東京: 1925年.
- ・藤瀬武彦. スポーツ文化財としてのオリンピック関連資料の収集について 第一報 - 1912年、1940年、及び1964年夏季オリンピックに関する収集品-. 新潟国際情報大学国際学部紀要, 4, 145 - 157, 2019年.
- ・藤瀬武彦. スポーツ文化財としてのオリンピック関連資料の収集について 第二報 - 1920年第7回アントワープオリンピックに関する収集品-. 新潟国際情報大学国際学部紀要, 5, 67 - 77, 2020年.
- ・國民體育會. 國民體育. 大正十二年十二月號, 東京: 1923年.
- ・國民體育會. 國民體育. 大正十三年三月號, 東京: 1924年.
- ・國民體育會. 國民體育. 大正十三年五月號, 東京: 1924年.
- ・日本体育協会編. 日本スポーツ百年. 財団法人日本体育協会, 東京: 1970年.
- ・日本オリンピック委員会. 近代オリンピック100年の歩み. ベースボール・マガジン社, 東京: 1994年.
- ・日本体育協会. 日本体育協会五十年史. 財団法人日本体育協会, 東京: 1963年.
- ・日本オリンピック委員会. オリンピック事典. 日本オリンピック委員会監修, 日本オリンピック・アカデミー編, プレス ギムナスチカ, 東京: 1981年.
- ・織田幹雄. 改定増補 陸上競技百年. 時事通信社, 東京: 1970年.
- ・太田芳郎. 世界テニス行脚 ロマンの旅 昭和の初め, 世界の舞台を歩いた日本デ杯チームの一匹狼随想録. アトミ, 東京: 1992年.
- ・力武敏昌. 連載20 陸上つわもの列伝 猿丸吉左衛門 万能誇った投てき王. 月刊陸上競技, 3, 講談社, 東京: 178, 2007年.
- ・谷三三五. 競走と練習 百米十五年. 三省堂, 東京: 1930年.
- ・ウィキペディア (Wikipedia). 1920年アントワープオリンピック (2020年12月24日確認).
- ・ウィキペディア (Wikipedia). 1924年パリオリンピック (2020年12月24日確認).
- ・ウィキペディア (Wikipedia). 1928年アムステルダムオリンピック (2020年12月24日確認).
- ・ウィキペディア (Wikipedia). スペインかぜ (2020年12月24日確認).

